

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

ディスチャージ (放電) 第一章



文・写真／レイラ・アズナブル

何回不審な顔をされただろう。腹を立てられた事もある。気味悪がられた事もあった。それでも、彼の面影を人ごみの中でみつけた時には、僕は追わずにはいられなかった。気まずい思いをしたとしても、万が一本当にそれが彼だったとしたら、そう思うと声をかけずにはいられなかった。

高校時代に、僕、夏木涼（なつきりょう）のルームメイトだった彼、林野柊（はやしの しゅう）が姿を消して五年以上たっている。少年だった僕も二年前に成人した。柊もまた、僕と同じ年月、旅を続けているのだろうか。彼の時間と僕の時間が同じだという保障は無かった。彼は若いままあらわれるかもしれない。あるいは、僕よりもはるかに歳上の男として帰って来るのかもしれない。柊の面影を持つ、さまざまな年齢の男達に僕は声をかけた。

振り返った時、その姿が見えた。あれから、五年たっていたなら、そうあんな感じかもしれない。思わず人波に逆らって走っていた。後姿が信号で立ち止まり、なにげなく見上げるその横顔にひやりとした。あの感情を閉ざしたような無表情。それから、どこか遠くを見るようなあの目。

「柊！」

声をかけるのと同時に、腕をつかんでいた。彼が振り返り、驚くように僕を見る。僕の手に彼の緊張が伝わってきた。

「…人違いです」 かすれるような声。

僕から視線を外そうとし、できないでいる。

「だめだ。柊。もうだまされない」

柊だ。今度こそ柊だ。手から伝わる緊張も、無表情なのに今にも泣きそうな印象も、柊だ。

「柊。妹に会った。ついこの前の事だ。きみがこ

の世界に僕を置いていってくれたからだ。

だが！ 僕は感謝などしないぞ。薄っぺらな感謝など、吹き飛ぶくらい僕は自分を呪った。何度も後悔した。なぜ、僕を置いていったっ！」

彼の体から力が抜けていく。

「痛いよ、涼。はなしてくれ」

あわてて手をはなし、もう一度つかんだ。はなしたらまたどこかへ行ってしまうそうだった。

「柊…。本当に君か…」

「なんだ。疑っていたのか。なら、もっと白を切れば良かったなあ」

「ばかやろう…」

僕の体からも力が抜けていった。

「またか。きみはよく泣くなあ」

ほほに手をやると涙が出ていた。手の甲で拭きながら言った。

「寮を出て部屋を借りてるんだ。少し歩くがそこ

でいいか」

「ああ…」

他人の居ない所で話したかった。多分、柗も同じだろうと思った。歩きながら、話しながら、彼の腕から手をはなせなかった。柗も、もうはなせとは言わなかった。

「いつ来たんだ？」

「一ヶ月ぐらい前かな。きみの世界に似ていると思つて調べた。この町には二週間ぐらい前だ」

「…そんなに前か。なぜすぐ僕のところへ来なかった」

「無茶言うなよ」

僕が彼でも、できなかっただろう。それに、僕がまだあの学校にいるのかどうか、彼は知らないはずだった。

だが、会いたいとは思つてくれたのだろうか。

だから、この町に来てくれたのだろうか。話す事がたくさんあつたはずなのに、何も浮かばなかった。柗のほうの話が続けた。

「涼。今、きみは何をしているんだ。高校はもう卒業したよな」

「ああ。そのままあの学校の大学に進んだ。きみが来るかもしれないと思つて。

もうすぐ卒業だよ。成人して、寮から出られるようになって、すぐに今の部屋を借りたんだ。寮に居たら自由がないだろ？」

身元不明人の情報があるたびに出かけたよ。費用はみんなおやじに出させた」

「おやじ？」

「母の結婚相手さ。向こうのテリトリーに入らなければ、自由にさせてくれる。一回だけ会つた。

母がさ、おやじつて言うのと、酸っぱい顔をするんだ。だから、ついね」

わずか十分ほどだが、中心部をはずれると、にわかには立ち木が多くなり、一階建ての民家も混じり始める。かなり古いが、十階建ての大きな建物の前で、僕は立ち止まった。

「ここだ。ほとんどが、独り者ばかりさ。で、あの学校の関係者は居ないよ。安心していい。

僕に関心を持つ奴が居ないところを選んだんだ」

重いガラスのドアを押し、中に入りながら振り返ると、柊は歩道に立ち止まり下を向いていた。僕はひやりとした。つい安心してしまった。

今、彼が逃げたら…。

柊の肩が振るえ、彼が笑っているのがわかった。笑っている彼を見たのは初めてだった。

歩道には街路樹ごしの日差しがさしていて、柊を照らしていた。僕はまた、涙が出そうにな

り、かろうじて止めた。

エレベーターのボタンを押すと、彼が確かめるように見た。部屋のドアの前でも柊は立ち止まり、部屋の中を見ていた。中に入って来ない彼を、不審に思い始めた頃、彼は言った。

「涼、きみ寒くないかい？」

覚えている。あの夜、彼が僕に言った言葉だ。

彼の目が笑っていた。

「ああ、少しね」

「ココアを入れるよ。僕の部屋に来る？」

「？ ああ、いいよ」

全部、あの時の言葉のままだ。何をしようとしているのだろう。今度は柊が先に立って歩き、僕がついていく。エレベーターに乗ると、僕の階の二階上のボタンを押した。

「柊？」

「ああ そうさ」

柊の部屋の作りは、僕の部屋と変わりはない。ただ、中に入れられた家具が極端に少ないので、寒々と感じるほど広がった。寝るために帰る部屋。そう感じさせた。持って行ける物は少ない、という柊の言葉を思い出した。慣れた手つきでココアをいれながら、柊が話した。

「僕も同じ条件で探したのさ。誰も僕に関心を持たないところ。なるべく部屋数が多くて、世話好きな隣人の居ないところ。あの学校の関係者の居ないところ。不動産屋はうそをついたのかな。きみが居た」

「僕が隠していたんだ。おやじが身元引受人になっっているから、OKだった」

「ここだけが条件にぴったりだった。ここに移って来て、一週間だよ」

「もつと駅近くにならたくさんあったらどう？」
これはいやみだった。

柊がココアを僕に渡し、床に座った。椅子が無い事に気がついて、僕も床に座った。

「学校に近いところにしたかった。ここからなら、歩いても二・三十分。自転車なら十五分かな。」

一度行ってみたよ。でも、これ以上近いところは嫌だった」

「なんで学校に近いところにしたのさ。」

僕は通学しなきゃいけなかったけどさ、きみはどこだって良かっただろう」

駄々っ子のように柊に詰め寄りながら、自分で自分が笑ってしまった。これでは高校生だった頃と変わらない。

ココアのカップを見ながら、柊が言った。

「きみを探すつもりだった。きみに見つからない

ように。

きみが今どうしているのか、ゆつくりと探し、きみの姿が見られたらそれで良かった」

僕が言わせた言葉なのに、僕のほうがうろたえてしまった。柊がそんなにあけすけに答えるとは思っていなかったからだ。

「この世界にきみを残した事が、僕には誇りだった。旅の間、それが僕を支えた。きみが幸せでいてくれるなら、それで良かった」

なんと返してよいかわからず、彼と同じようにココアの Copp を見ていた。幸せ？ 常に足りない物を感じ、自分への怒りを抱えながらも、幸せと言えるなら、僕は幸せだったのかもしれない。ただ、それは僕が選んだ道ではなかった。

「きみの部屋に行くまでの間に、僕はきみをまわつたりだつた」

やっぱり、そうだったのか。

「きみに会えた。元気でいる事もわかった。だから、このまま逃げて違う町に行つても良かった。

でも、もう少し、もう少しきみと話をしてから……。そう思って逃げられないでいた。そうしたら、きみはここに入つて行くじゃないか。ここに移つて来てからまだ一週間。僕らはきつと何度もすれ違つていたんだろう。今日逃げても、いつかはまた出会つていた。僕はきつと、他の町には行けはしなかつたらうからね。そう思つたら、なんだか笑えてしまった」

そう言いながら、やっぱり柊は泣きそうだった。

「……柊。この部屋を借りる金はどうしたんだ？」
彼がポケットから小さな袋を出した。

「これさ」

「？」

「ダイヤの原石だ。大きいだろ？　こういった物は、どの世界でもそこそこ値打ちがあるんだ。幸運だったのかもしれないな。比較的原始的な世界に行った時に、作業台の上にむき出しのまま置かれていた。近くで雷が鳴っていて、僕は自分が次の世界へ飛ばされそうだと感じていた。両手でそのへんにあった原石をつかんでポケットに詰め込んだよ。あとで判ったが、ほとんどがダイヤだった。そばに居た男達があわてて止めようと走って来た。僕が見たのはそこまでだ。

次にあの世界に行ったら、僕は手配犯かな。それとも、あの場所に居た男達が疑われたのかな。僕が、ダイヤと一緒に消えて無くなったと証言したんだろうからね」

原石をよく見ようと、柊の手に顔を近づけた。その拍子に彼の息がほほにあたり、僕は思い出した。

「柊。きみ、同性愛じゃないって言ったよね」

「ん？　ああ」

袋の口を丁寧に結びながら、柊が答えた。

「僕にキスしようとしたらう？」

僕は何を言おうとしているのだろう。柊も同じ顔をして、僕を見ている。

「なぜキスしようとした？」

「母がね、：そういう人だった」

原石の入った袋を、柊は胸のポケットにしまいながら答えた。ああ、そうやって、いつも持っているんだね。いつ、飛ばされても良いように。

「：母は、なにかと僕らにキスをしたがった。おはよう。いつてらっしやい。ありがとう。おやすみ。」

：あれは、さようならのキスだった。」

柊の言葉の最後は、注意しないと聞き取れないほど小さな声だった。率直になんでも答えてく

れる彼に安心して、僕は聞いてはいけけない事まで聞いていたようだ。柊は、かなりの無理をして、僕に答えてくれていたのだ。

「柊。ねえ、柊。泣いていいよ」

あの夜の僕の言葉だった。

「僕は泣いてないよ。泣くなんて違う」

柊が答える。あの時と同じように。

柊も僕と同じように、何度もあの時の僕らの会話を思い出していたのだろうか。僕が自分を責めながら思い出していた思い出を、柊は孤独に耐えるために思い出していたのだろうか。

「…じゃあ、これはなんだ」

僕は手を伸ばし、指の先で柊のほほに流れる涙を拭いた。柊が顔を伏せた。

今日はすごいな。一度も見た事のなかった柊の笑い顔に、泣き顔まで見てしまった。

「つまらないなあ。同性愛じゃなくて、ただのマ

ザコンか」

「うるさい」

顔を両手で隠しながら、柊が言う。僕はその柊の頭を、彼の両手ごと抱きしめた。

「きみが泣いてないと言った後、僕はこう言ったよね。」

『ねえ。きみが行く時に僕がそばに居たら、連れて行ってもいいよ』

僕は、なんでそんな言いかたをしたんだろう。

後悔していた。取り消すよ」

僕の腕の中で、柊の体が緊張した。

「今度きみに会ったら言おうと思っていた。きみが行く時には僕も行く。きみだけでは行かせない」

「だめだ、できない」

うめくようにそう言い、静かに声を殺して、柊は泣いた。

あの時僕は、僕を捨てた母をうらみ、死んでしまったおじいを求めて、柗の胸の中で泣きながら、心の奥底では安堵を感じていた。今、同じ想いを柗も感じてくれていたのだろうか。そうだといいのだが。

「柗？」

「なんだ」

胸の中でくぐもった声で、柗が答えた。

「きみのママはおかえりのキスはしてくれましたか」

「ああ」

「しようか？ してもいいよ」

「ふざけるな」

柗は泣き続けているのに、僕はとても幸福だった。そして、これ以上無いほどの幸福という言葉はうそだと思った。これ以上の幸福は無いと思っ

た次の瞬間に、もっと大きな幸福感が僕を包んだ。静かに降る雨のような、柗のすすり泣きを聞きながら、今度も僕のほうが先に寝てしまった。けれど、寒さに目を覚ますと、柗も僕の横で眠っていた。ベットから布団をはがし、かけながら思った。今度は一緒だ。柗。これからは僕が守る。



※『春雷』の続編となります。そして、第一章とあるように第二章もあります。